
魔王城攻略

有為

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王城攻略

【Nコード】

N2381I

【作者名】

有為

【あらすじ】

サブレサ

討伐する者として、魔王城の攻略に挑む僕たち一行は、ひたすら魔王の首を狙って大暴れ。ちょっと考えすぎで、いろいろ悩んでしまう僕と、何も考えずに敵に突っ込んでいく、大男のドーザと、一番冷静で頭もいいミリアの三人で、とにかく魔王討伐を目指す、短めのファンタジーです。

短いお話にしたいので、世界観など、細かい説明は省略しております。

プロローグ（前書き）

初めて小説を投稿します。更新は一日一回、4〜5日で完結の予定です。

酷評でも、意見でも、何かありましたらどんどんください。ただ学業が忙しかったり部活が忙しかったりするのです、もしも返事を返せなかったら本当にごめんなさい。

プロローグ

黒く汚れた肉が押し寄せる。

僕の剣は魔獣の血にまみれ、すでに腐敗を始めた肉があたりに異臭を放つ。

迫るかぎづめをかわしながら、片端から敵を切り捨てていく。

後方では素早く呪文を唱える銀髪の魔女が、そして少し離れた所にも、その巨大な斧を振るって豪快に獣を倒していく斧使いの大男がいる。

僕たちは魔獣を倒すための訓練を受け、さまざまな戦闘方法を習ってきた、いわば魔獣討伐のスペシャリストだ。

僕たちのように、魔獣討伐を専門的に行う人間を、サブレサー討伐する者と呼んだりする。

この世界にはあちこちにサブレサーが訓練するための施設があって、毎年とても多くの人が魔獣討伐のためのスキルを獲得していく。なぜそんな事をするのかというと、僕らはずっと魔獣たちと戦争をしているから。人がこの世に誕生して以来、魔獣との闘いが途絶えたことはないらしい。

なぜだろう？

そう思う人も多いと思う。だって戦争って言ったら、普通はいつかどちらかが勝って、それで終わる。けれど、人と魔獣の戦いはいまだ終わっていない。休戦なんてこともなかった。

魔獣の好物は人の肉だ。他の動物も食べるけど、やっぱり人間の肉が一番好きらしい。とにかくやつらは人を見れば必ず襲ってくる。そして人間もまた魔獣のことは好かない。まあ、出会えば必ず襲われるのだから、好きはあはすがないのだけれど。

大昔から戦っているのにまだ決着がつかないのは、魔獣の生まれに関係している。

やつらが生まれるのに親は必要ない。どこからともなく生まれて

くるのだ。だから、たとえ魔獣を全滅させたとしても、すぐにまた復活する。そりゃいくら人間が強くて勝てっこないわな。

人間は今まで何とか全滅させられずに済んでいる。

とても危なかった時代もあったらしいけど、今はそれなりの数がいるから大丈夫。魔獣と違って、人間は全滅させられたらそれで終わり。だから絶対に負けられない。

ほつとくと魔獣はどんどん増えていくから、だからサプレサーが必要とされている。

ものすごい数の魔獣を倒して、歴史に名を残す人たちがいる。人は彼らを「戦^{オディン}の神」と呼んで敬った。きっと彼らがいなければ、人々はとつくに魔獣に負けていただろう。

僕らもそんな人たちにあこがれて、ずっと訓練を受けてきた。そして今のパーティが生まれた。

まだそんな大活躍はしていないけど、弱い魔獣ならかなりの数を倒してきた。

そして今、僕は……………

魔王城侵入

巨木に背を預けて、僕らは一息ついていた。

その巨木の向こう側には、毒々しい気配を放っている城が見える。あたりは常に暗雲がたれこめ、時折雷が鳴っていた。

雷に照らされたその城は、決して美しいお姫様が住んでいそうなお城ではなかった。そこにいるのは魔獣の中でも相当厄介な、言語を理解する魔獣。一般に「魔王」と呼ばれる奴であった。

「魔王」はたまにしか生まれない魔獣の一種で、そこらの脳みそのない魔獣とは違って集団で人間を襲ってきたりと、とにかく厄介な存在だ。

こいつを倒せば世間にもかなり認められるようになる。なんてったって、やつらは頭がいいだけでなく、その力も半端でないのが多いからだ。

「そろそろ行きましようか」

そう言つてゆっくり立ち上がったのは、銀色の流れるような髪を持ち、身長も結構高い、凄腕の女魔法使い、回復魔法と攻撃魔法を使いこなす、ミリアだ。彼女は近接戦闘はできないのだけれども、魔法の腕は、世間でもかなり強いほうだと思う。このチームで一番の頭脳派でもあった。

「正面から突っ込むか？」

そしてこの超巨大な斧を振り回す大男こそ、我らがチーム最大の攻撃力を誇る、ドーザ。そのごつごつの筋肉と、ばさばさの髪、おおざっぱな作りの顔は、いかにも戦うために生まれたような外見だ。ミリアの最大魔法の威力よりはさすがに劣るけど、力技で彼に勝てる人はまずいない。ただ最大の難点は、いつも後先考えずに敵に突っ込むこと。作戦も何もあったものじゃない。

そして僕は、クルー。青っぱい色の目に、髪もやや青みがかっている。よく外見年齢が幼いといわれるのを、ひそかに気にしている。

もしかしたらこのしゃべり方が悪いのかもしれないけど、これはなかなか変えづらい。一応魔法も使えるけど、普段は前衛として、ロングソードで戦っている。このロングソードは、切れ味抜群、そこらの武器屋じゃ絶対売っていない高級品。

僕の実力は……、剣技だけじゃドーザに勝てないし、魔法だけじゃミリアに勝てないけど、両方合わせたら、結構強い自信はある。もしかしたら三人の中で一番強いかもしれない。難点は、考えすぎる。らしい。

ちなみに僕たちはみんな18歳。同期で学校を卒業した仲間だから、仲は結構いいほうだと思う。

「たぶん正面以外に出入り口もないだろうから、正面から行こうか。いちいちぐるりと回ったところでまた魔獣に襲われるのがオチだし」そしてなぜか僕がこのパーティのリーダーになってしまっている。僕はミリアに頼もうと思っていたのだが、ミリアもドーザも、僕を推薦してくれた。パーティ作るうって言い出したのは僕だったから、断るに断れなくて、結局僕になってしまった。

正面にある門の近くまで来てから、僕らは近くの木に隠れた。

門番らしき魔獣が二匹、どっちも力の強い、オーガだった。

「私が一撃で倒すしかないかな？」

ミリアが確認をとってきた。僕らが軽くうなずくと、彼女は呪文の詠唱に入った。

「code:6306b・光の矢よ、疾く飛んで行け」

彼女の手から放たれた二筋の光が、気づかれるよりも早くオーガの心臓を貫いた。あいも変わらず恐ろしい精度だ。

魔法は、その種類や威力、属性によって特定のコードが決まっていて、それらをつなげたあとに、魔法のイメージを具体化するための言葉による呪文を唱えることによって発動することができる。

魔法使いは、最低でも自分の使う魔法のコードは覚えなければいけないから、けっこう大変だ。

僕らはすぐに門まで走っていった、最初に着いたドーザが、力で

門をこじ開けた。絶対開かなさそうなかんぬきが掛かっていたのに、肉体強化の魔法を使ったとはいえ、恐ろしい力である。

中に入ると、城の入り口まで結構な距離があることが分かった。僕らは見つからないように祈りながら、全力で走った。すると入口のほうにも護衛のようなやつがいた。

「しまった！」

一番視力のいい僕が思わず叫んだ。そのせいで余計に僕らは目立ってしまった。

「ギャアアア！」

入口にいたりザードマンらしきやつが奇声を上げた。おそらくこれが侵入者が来たという合図だったのだろう、なんだか城の中が騒がしくなった気がした。

「この野郎！」

ドーザが一気に加速した。こうなると僕らの足では追いつけない。リザードマン？たちも戦闘の構えに入った。が、ドーザがあつという間に蹴散らしてしまった。

僕らが息を切らせてたどり着いたところには、ドーザはすでに入口を開けようとしていた。

「はあっ」

気合を入れてドーザが体当たりすると、かんぬきを掛けられていたらしい扉は無残にも破壊された。

その衝撃で扉のすぐ後ろに構えていた敵も吹き飛ばされた。

すぐに僕たちもドーザの後を追った。今度は完全な乱戦になった。四方から押し寄せる敵を、休みなくたたき切った。僕とドーザがひどい傷を負ったびに、ミリアが回復呪文を唱えた。僕も剣で戦いながら、同時に攻撃呪文を唱えた。

「code：0544c・炎の海を、我が手より解き放ち、敵を飲み込め」

そんなことを、何十分も続け、ようやく僕たちは敵を掃討した。そのころには、僕たちはボロボロ。魔法の節約のため、細かい傷は

治していなかった。

「畜生が、こんなんじゃ魔王に会う前にぶっ倒れちまう」

ずっと重たい斧を振り回していたドーザも、かなり疲れているようだ。しかし休んでいては、また、敵が集まってくるかもしれない。「仕方ないさ。とにかく少しでも早く魔王を見つけようよ。長期戦はこっちが不利になるだけだよ」

僕の提案に、皆頷いて、歩き始めた。とりあえず道がわからないので、端から順番に道を調べていった。

部屋を調べながら、僕は悩んでいた。

扉をあけるたびに魔獣が襲ってくるので、正直いうと僕らの疲労は激しかった。今この状態で魔王と戦っても、勝てるかどうかかわらない。

一度引き返すべきだろうか？

そんなことを考えながらも、体は城の構造の把握に努めて休みなく働いていた。しかし三人とも疲労の色は隠せなかった。

リーダーであるがために、僕が決めなければいけない。二人の命を預かっている以上、安易な決定をするわけにはいけない。どうしよう？

思考が堂々巡りを始めた。気がつけばまったく同じことを考えているだけだった。これでは永久に答えが出ない。

「どうしたの」

不意にミリアが話しかけてきた。

「いや、本当にこのままいつて大丈夫かなと思って……」

僕の答えは、尻つぼみになってしまっていた。

「なんだよ、んなもん、いちいち悩むだけ時間の無駄だろう。今更引き返したら、それこそ無駄に危険な目にあっただけで終わっちゃうじゃねえか」

そんな僕の悩みを、ドーザが吹き飛ばした。というより踏みにじった。

「それでいいのかな……？」

「よくなかったら誰がこんなこと言うかよ。悩む余裕あったら、なんか一発逆転の方法でも考えてくれや」

「そうよ、そんなこと考えていても、今更意味がないわ。今は先に進むことを考えましょう。いざとなったら、その時どうにかすればいいし」

「そっか……」

二人に励まされて、納得したかどうかとか関係なく、なんか考えているだけ無駄な気がしてきた。どっちみち二人は特攻する気満々だし。

しばらくあてずっぽうに扉を開けていくうちに、怪しい魔法陣が敷かれている部屋を見つけた。

「何だろう、この部屋……」

僕は呟いて、慎重に観察を始めた。

「これは転移系の魔法陣じゃない？」

ミリアがざっと見て予想を立てた。多分それで合っているんだろう。僕よりもミリアのほうがはるかに魔法関係の知識は深い。

僕らが休憩も兼ねながら魔法陣の細かいところまで観察していると、突然魔法陣が光り始めた。僕らはあわてて魔法陣から離れ、壁によった。

僕らの見守る中、魔法陣は強烈に光り輝いた。

魔王城侵入（後書き）

どうだったでしょうか？感想など、もしよろしければお願いします。

決戦・追跡

魔法陣の中央には、何かがいた。

「こんなところまでご苦労なこつたのお」

魔法陣の中央に現れた何かからは、老人のものと思われる、ずいぶんとしわがれた声がしてきた。性別はおそらく男。

「あなたがこの城の魔王ですか？」

ミリアが丁寧に関いかけると、いまいちやる気を感じられない返答が返ってきた。

「難しい質問じゃのお」

敵の全貌が明らかになると、僕は正直拍子抜けした。どこにでもいそうなじいさんが、黒いマントをかぶって無理にコスプレしているようにしか見えなかったからだ。確かにその何年も生きたことを示すしわや、曲がった背中中は魔王っぽく見えなくもないが、何とていうか、強者のオーラがないというか、絶対にこの城の主って感じではなかった。

「しゃべっている癖に魔王でないわけあるか、寝言は寝て言えっ！」
敵の姿を確認するなり、ドーザがおしゃべりは無用だとばかりに向かつていった。

しかしいきなり戦闘態勢に入る覚悟ができていない僕が、ついにやいてしまった。

「つてかいきなりそこの部屋でボスに会うか？普通」

しかし戦いはもう始まっていた。ドーザが一気に魔王との距離を詰めると、その巨大な斧を振りぬいた。敵はまったく余裕のないかわし方で、辛くも避けたものの、ドーザがすかさず追撃を加えた。敵は必死に避けたり、魔法で防いだりしていたが、やられるのは時間の問題だろう。どこからどう見ても悪役はドーザにしか見えなかった。

僕の中で魔王のイメージが思いっきり壊れていった。なんか弱い

ぞ、この魔王。

「くっ、やりおるな。やはりまともに戦っては少々分が悪いようじや」

そう言うなり、魔王は片手でポケットをまさぐると、何本もの怪しげな液体の入った瓶をつかみ、ドーザに向かって投げつけた。すぐにドーザは反応して、うまく斧ではじいたり、かわしたりして、液体に触れることはなかった。おそらくあの液は麻痺の呪文が付加されたアイテムだろう。触れたらミリアが解毒しないといけないところだった。

と僕がのんきに眺めているすきに、敵はドーザと距離をとることに成功し、呪文を唱え始めた。どうやらさっきの瓶はドーザと距離をとるための牽制だったらしい。

「code:6312b・光の壁よ、我に仇なす敵を防げ。code:9012a・見えざる道を作れcode:9745:d・定められし文様の下、世界を渡れ」

すると部屋に最初からあった魔法陣が再び輝き始め、魔法の壁が敵を囲い、そして輝き始めた。

「しまった、二回も使えるのか、この魔法陣！」

基本的に魔法陣は特定の用途のために作られ、難しい魔法を完成させるためのものなので、この魔法陣の利用方法はおそらく最初と一緒に、つまり転移系の魔法が発動するのだろう。

「くそっ、逃げられる！」

しかし焦っていたのは僕だけで、ドーザは魔法陣を囲んでいる壁を破壊しようとしていたし、ミリアはなぜか余裕たつぷりの表情で笑っていた。

次の瞬間、
ばちい

と、激しい音と光を出して、なぜか魔法陣がはじけ飛んだ。

「こんなこともあるのかと思って、先に魔法陣は壊しておいたわ」
ミリアがしてやったりといった感じで、説明してくれた。

魔法陣の崩壊と同時に、壁も破壊されたため、魔王はひどくうろたえていた。

「まさか、いつの間につ」

言うが早いか、魔王はすぐさま別の行動に出た。頭の回転の速い魔王だな。

敵はまたポケットからいろいろなものを取り出すと、なりふり構わず僕たち三人に投げつけてきた。どうやら相当切羽詰まっているらしい。

見たことのないような色合いの液体が詰まった瓶やら、どう見てもたまたまポケットに入っていたようながらくたなど、得体の知れないものがたくさん飛んできた。

なんか危なそうなものがかなり混じっていたので、僕たちは必死で避けた。

そのすきに敵は僕たちに背を向けて走り出した。なんかワンパターンだな……。

僕たちの後ろに入口があり、ざっと見たところ入口はこれしかなかった。油断していたのだが、どうやら反対側の壁に隠し扉があったようだ。魔王は必死の形相で扉を突き抜け、そのすぐ後ろにあった階段を上っていった。

「逃がすかつ」

僕らもすぐさま追いかけた。もはや出し惜しみすることなく、全力で走ったが、疲れているせいか、あまり差が縮まらない。

「くそつ、あんな老いぼれにつ」

ドーザが加速し、僕たちを突き放して追いかけていく。二階分くらい上がったあたりで階段は終わり、なんだかたくさん魔獣のいる部屋に来てしまった。

「くそつ、あと一步で追い付くつてのに」

ドーザが向かってきた敵を次々と倒しながら、悪態をついた。

僕たちもすぐに加勢し、目の前の敵だけ倒して再び魔王を追いかけた。部屋の扉をくぐり、魔王の姿を探し求めると、まだそんなに

遠くに入っていないようだった。

途中邪魔な敵を蹴散らしながら追っていたので、なかなか追いつかない。

魔王が入って行った部屋に三人でなだれ込むと、いつの間にか魔王がいなくなっていた。

「くそっ、どこ行きやがった」

ドーザが息を切らしながら悪態づいた。

「どう見ても扉は一つしかないように見えるのだけど、また隠し扉があるのかしら」

「とにかく他の出口を探そう。きっとまたおんなじような仕掛けだろうから」

僕たちはすぐさま隠し扉の類を探し始めたが、いかんせん、部屋が広すぎる。

「つたく、面倒くせえことしやがって」

ドーザが速攻で嫌になった。かくいう僕も焦っているせいか、作業に集中できない。

「code:9310b・封印せよ、扉は岩の如く、不動なる壁となれ」

突然、ミリアが僕たちが入ってきた扉を封印して開かなくしてしまった。敵から逃げている時ならわかるけど、追っているときに使うような呪文じゃない。

「なんかいい方法でもあったの？」

僕が期待して聞いた。

「あったわ。多分これで見つかると思うから、部屋の中央に集まって」

僕たちはすぐに部屋の中央に集まった。すると、ミリアが魔法陣を敷いていたので（魔法で魔法陣を書いたため、魔法陣そのものは魔法の発動前から光り輝いていた）、僕たちは促されるままに魔法陣の中に入った。

「code:9113b・鍵を開けよ、制限を解け。code24

09c・風よ激しく、思うがままに、すべて破壊せよ」

なぜか風の系統の呪文でも高位の攻撃呪文を使ったので、僕らはいぶかしんだが、すぐに効果が出た。

密室の状態で、魔法で空気が生成されたため、部屋の気圧が上がリ、隅のほうにあった隠し扉が弾け飛んだのだった。

「おお、あんなところにありやがったかあ」

真っ先にドーザが駆け出した。

僕らもすぐさまあとを追い、隠し扉に飛び込んだ。

さすがに隠し扉の先だけあって、その通路には魔獣はいなかった。不経済なことに、うつすらとだが明かりがついていた。

もうだいぶ放されたであろう距離を詰めるため、ドーザは僕らを待つことなく突っ走った。

通路を抜け、魔獣のたくさんいる部屋に出て、急いでそいつらを叩き伏せて反対側の扉から通路に出たところで僕たちは立ち止まった。どうやら魔王に逃げられたらしい。どこを見渡しても、魔王の姿は見当たらなかった。

「どうしよう？これじゃどこを探したものか、考え物だね」

僕の言葉に、二人とも黙りこむ。

そうやって考えこんでいる間にも、また魔獣が襲ってきた。僕らは疲れた体に鞭打って倒していくが、疲労は蓄積していくばかりだった。

「そろそろ限界っぽいよね……」

僕がつぶやいたが、今度は二人とも同意見のようだ。

「よし、それならさっきの隠し通路に戻って休もうか」

僕が言くと、二人はすぐに従ってくれた。

通路に入り、扉をしっかり締めると、僕たちはゆっくり休むことができそうだった。一応警戒は怠らずに、ミリアを真ん中にして僕が扉を、ドーザが通路の先を見張っていたが、何も襲ってくる気配はなかった。

「どうやったら魔王を倒せるだろう」

「んなもんきまつてるだろうが。首切り落としちまえばさすがの魔王だって生きちゃいらねえだろ」

「いや、そういうことじゃなくてさ」

「今度見つけた時にはしつかり三人で包囲したほうがいいわね」

「しかし転移魔法を使えたなんて、さっきの実力からは全く想像できないんだけどな。何者なんだ、あいつは」

「近接戦闘には向いていない魔法使いタイプかもしれないわよ。戦うときは変なことされる前に倒したほうがよさそうね」

「しかしどうやってあいつを見つけよう。もしかしたらここから逃げ出して別のところに城を構えるつもりかもしれないよ」

「そこまで弱気な魔王がいるとは思えねえんだが」

そんな感じで僕たちが小声で相談していると、いきなり城が震え始めた。

「え？地震？こんなときに？？」

僕がパニックになっていると、通路の壁が崩れ始めた。

「やばいつ、とりあえず通路から出るぞっ」

ドーザの叫びに従って、僕たちはすぐに通路を出た。

広い部屋に入って初めて気がついたのだが、崩れているのは壁だけで、天井は特に崩れている気配はなかった。僕たちはとりあえず部屋にいた数匹の魔獣を手早く始末して、壁から離れて安全を確保した。

揺れはすぐに収まった。

僕たちは少しずつ落ち着き始めた。ところが、

「ねえ、あれは何？」

ミリアの動揺した声で、初めて気がついた。

壁の表面は崩れていたのに、どうやら壁が完全に崩れたわけではないようだった。何が言いたいのかというと、崩れた壁の跡には、無数の目玉がくっついた板がそり立っていたのだ。

僕の混乱が頂点に達したのを見計らったかのように、一つの壁モドキを覆っていた目玉たちがうごめき始めた。

僕たちが必死に吐きそうなのを堪えていると、目玉が魔法陣のよ
うなものを形作り始めた。

「なんかやばくね？」

「やばい……気がする」

「どうかしら……」

あまりの気持ち悪さに僕たちの思考が正常に働かなくなっている
うちに、それは完成し、輝き始めた。

決戦・追跡（後書き）

すでに物語は中盤です。

決戦・逃亡

「また転移魔法みたいよ」

ミリアがつぶやいたのとほぼ同時に、魔法陣の光は霧散し、再び魔王が現れた。

「待たせたの、今度は本気で相手してやるぞ」

相変わらずやる気を感じられない声音で、挑発ともとれる言葉を投げかけてきたが、見た感じではさつきとあまり変わった感じはない。しかしここまで自信满满的な発言をしているのだから、きっと何か奥の手があるに違いない。僕は慎重に敵の様子をかがっていた。のだが、そんなことは一切考えずに突っ込んでいく影が一つ。

「うおおおお！」

ドーザが速攻で切りかかっていった。魔王はいきなり突っ込んでくるドーザに慌てて飛び退り、かなり早口で呪文を唱えた。

「code：*7999e・生ける城よ、わが命に従え。床よ、隆起せよ、壁よ、組みかわれ、我を守る盾となれ」

ドーザの斧が、あと一步で魔王の首を狩るところで、敵の呪文が完成した。床が突然盛り上がり、ドーザを弾き飛ばした。

さらに壁が動き始め、あちこちに目玉を落つことしながら僕らと魔王の間に立ちふさがった。

「うえ、なんだこの気持ち悪い呪文は」

僕が若干青ざめながらつぶやくと、ミリアも、

「こんな気持ち悪い呪文見たことないわ、いったい何なのよ、これは」

ちなみに僕たち、特にミリアはかなり魔術を学んでいるので、たいていの呪文は知っている。それでも見たことがないとは、よっぽど特殊な呪文か、新しく開発された呪文かのどちらかであるかと思えない。呪文の開発というのは、かなりの天才が何年もかけて作り上げるもので、そうそうできるものではない。いったいこの呪文

は何なのだろう。

そんなことを僕が考えているうちに、敵が新たな呪文の詠唱に入ったのが聞こえてきた。

「code：*7997e・生ける城よ、わが命に従え。全ての物は、敵を切り裂く剣となれ」

今度もまた知らない呪文だったが、内容から考えるにさつき放った呪文とセットになっている呪文なのだろう。今度は絨毯やら、壁の残骸やら、僕たちの周りのありとあらゆるものが動き始めた。呪文の内容からこれからは何が起こるか想像にたやすかったので、僕は身構えた。

直後、四方八方から、いろいろなものが飛んできて、僕らを襲った。

ミリアが即座に防御魔法を展開して、透明なシールドを張ったが、これは魔力の消費が激しすぎる。消えてなくなるのは時間の問題だった。

「やばいつ、逃げるぞ！」

珍しくドーザが逃げる姿勢を見せたので、僕たちはわき目も振らずに逃げた。防御魔法をくぐり抜けた物が、いくつも僕たちにあたったが、そんなの気にしていられない。扉を蹴破り、隠し通路に飛び込んだ。すぐさまミリアが扉を修復して、塞いだ。瓦礫やらなんやらがすごい勢いでぶつかってくるので、すぐに崩壊しそうだった。

「勢いでここに来ちゃったけど、どうする？」

僕は壁が崩れたせいで完全にふさがっている通路を見て二人に聞いた。

そう言っている間にも、僕たちを守っている扉は悲鳴を上げている。

「どうしようもなさそうね、もしかしてチェックメイトかもしれないわ」

「さすがにやばくねえか、それ」

珍しくドーザも弱気になっていた。

どうしたらいいのだろう。正直言っただんな反則じみた魔法に勝てるとは思えない。考えれば考えるほど、僕たちが死ぬイメージしか思い浮かばない。

そもそも新米パーティで魔王に挑んだのがいけなかったのだろうか、或いはどこか呑気に構えずぎていたのだろうか。

怖かった。

死というものは考えれば考えるほど恐ろしい。自分という存在がなくなる。自分が今まで積み重ねてきたものがすべてなくなってしまう。

この時の僕の思考は恐怖にとらわれていた。ほかの二人もそうだろう、今まで多少危険な目にあったことはあったが、ここまで死と隣り合わせになったことは、今まで一度もなかった。

もちろん、モンスターに殺されることもあるかもしれない。そういうことは、討伐する者になるうと決めた時から、覚悟しているつもりだった。でも、本当にピンチになって、初めて分かった。

僕の覚悟は所詮口先だけのものだったのだと。

知らず涙がこぼれた。

なぜかはわからない。けれども悲しかった。自分の覚悟の弱さに。そして自分の命に。

僕たちの周りの空気が極限まで冷え込んだとき、僕たちを守っていたドアがはじけ飛んだ。

「わっ！」

一番近くにいた僕は、とっさに剣で体を守った。さっきまで戦うことをあきらめていた割に、ちゃっかり防御しているところは、やはり生存本能とでも言うべきか、向かってくる無数の凶器の中でも特に危なそうなのを、何とかはじく。

僕は半ば自棄になっていた。

傷が少しずつ増えていく。が、そんなものは気にする余裕がなかった。瓦礫の破片をはじき、向かってきた絨毯を数十メートル先へ

吹き飛ばした。

飛んできたシャンデリアを、魔法で打ち砕いた。
ボロボロの壁画が飛んできたときには、剣でばらばらにしてやった。

何も考えず、無数の凶器と、勝ち目のない戦いを、いつまでも続けた。

そう、いつまでも。

ふと僕は思った。なぜ僕は勝ち目のない戦いを、苦しみしかない戦いを続けるのだろう。

戦いが続けば続くほど、僕は苦しい。なのに、なぜ僕はいつまでも戦い続けるのだろう。

疑念は膨らむばかりなのに、それでも僕は剣を止めない。止められない。

「それはな……」

不意に後ろから声がした。僕が止め損ねた瓦礫を粉碎しながら、ドーザが言った。

「俺たちは戦い続ける宿命にあるからだよ。討伐する者としてな。」

勝ち目がなくなつたって、終りがなくなつたって、負けなければそれでいいじゃねえか。負けなけりや、俺達は生きてられんだからよ」

いつから僕が思っていることを口に出していたのかはわからない。或いはしゃべらなくても僕の考えていることはドーザにわかってしまったのか、彼も辛いはずなのに、それでも戦えと、戦い続けると言っている。

「ドーザの言う通りだよな。どの道僕らに勝ち目はなかったんだもんな」

サブレサー
討伐する者の宿命、勝ち目のない戦い。無限に闘われる敵に勝てるはずなどないのに、それでも人は戦ってきた。ただ、負けなために。

僕の心は決まった。

自棄になっでいて、うまく対処できていなかった物も、少しずつ

防げるようになってきた。

「そうよね……、あきらめちゃダメよね……」

ミリアがつぶやいた。彼女もまた、僕と同じように絶望していたのだろう。さっきまで感じられなくなっていた彼女の生気が、再び感じられるようになった。

深く考えていないようなドーザが、一番いい結論を出していたのかもしれない。いや、深く考えなかったからこそその結論なのだろうか。

とにかく、僕たちは絶体絶命の状態にありながらも、元気を取り戻した。

「とにかく、逃げられるだけ逃げましょう」

「逃げるったって、どうしようか、この状況」

「とにかく守れ」

ドーザは完全に僕に託しやがった。少しはまともな方法を考えてほしいものだよ。

僕は疲れてきた体に鞭をうち、守り続けていた。が、やはり状況が状況だけにそう長くは持たなかった。汗が目に入って、思わず目を閉じてしまった、その隙に、目の前にでっかい瓦礫が迫っていた。「しまっ！」

とっさに腕で防いだものの、僕は大きく後ろに飛ばされてしまった。ドーザが僕をよけて、器用に瓦礫だけ粉碎したが、僕は勢いを殺せず、ミリアに激突。さらに受け止めた時の衝撃で腕が使い物にならなくなってしまった。

「うっ、ごめんミリア」

ミリアもかなり痛そうだったが、何とか大丈夫そうだった。

無数に飛んでくる凶器を、今度はドーザが一人で防いでいた。僕は何とか起き上がったが、もはや剣を握れそうにもない。ドーザは、反応速度が速いからか、或いは図体がでかいからなのか僕よりもとりこぼす数は少ないが、それでも結構な数が後ろに飛んできた。ミリアの魔力はほとんど尽きているはずなので、僕がどうにかするし

かないのだが、なにせ、魔法というのは規模が大きいものばかりで、こんな狭いところで使ったら、間違いなくドーザをボロボロにしてみよう。

そうやって考えているうちにも、僕とミリアの体に傷が増えていった。

そろそろ意識がもうろうとしてきたところに、ようやく打開策を思いついた。

「code:0544c・炎の海を、我が手より解き放ち、敵を飲み込め」

呪文を唱えると、僕はドーザの向こうに魔法を発動させた。

爆発によって壁が崩壊し、ひとまず凶器の侵入が食い止められた。崩れた瓦礫が襲ってくるのではないかと心配したが、その様子を見せなかったので、多分魔王がいる部屋のものしか操れないのだからと勝手に納得して、ひとまず休むことにした。

僕が休んでいる間に、ドーザが残りの凶器を叩き潰してくれた。

「ふう、助かった」

「まだ助かったわけじゃないわよ」

「でもこれでまだしばらくは持つんじゃない」

「まあ、そうね」

隠し通路は僕たちによってあちこち破壊され、明かりもほとんどなくなっていた。しかし僕たちは、もう暗く落ち込んだりしていない。僕たちはこれからの作戦を話し合うことにした。

「で、なんかいい案はねえのか」

早速ドーザは僕たちに聞いた。

少しは自分で考える努力をしてほしいものだ。

「うーん、どうしようもないよなあ」

そう言いながらもやっぱり僕も丸投げ。

「そうね……」

ミリアも考え込んでしまった。

しばらく沈黙が続いたあと、僕が苦し紛れの案を出した。

「それならさ、ミリアが魔力回復するのを待つて、そしたらミリアがドーザにシールド張って、僕がミリアを守っている間にドーザが敵に特攻するというのはどうだろう？」

「お前腕痛めているのにどうすんだよ」

「今のうちに回復魔法を使っておけば、何とかなるんじゃないかな」

「まあ、それしかないかもね、やれるだけやりましょう」

「仕方ねえな、それしかないさそうだ」

二人の同意を得たところで、僕は腕の回復に専念することにした。

「ところでミリアはどのくらいで回復しそうなんだ」

ドーザの質問に、ミリアは少し考えたあと、

「もうけっこう回復してるんだけど、ドーザが魔王のところにとどまり着くまでシールド維持しなきゃならないなら、あと三十分くらいは休まなきゃいけないかもしれないわね……」

「三十分か……、それまで待つてくれりゃあいんだけどよお、見たところ後十五分くらいしかもたないんじゃないか？」

ドーザの言うとおり、瓦礫の山がこの十分くらいでけっこう崩されつつあった。というか魔王が別の魔法を使えば、あっという間に取り除ける気がするのはいけいだろうか。何というか、魔王の頭が悪すぎる気がしてならない。

「それならあえて崩される少し前に飛び出すのはどうだろう。不意打ちなら少しは早くに向こうまで行けるんじゃないか」

「そうね……、それならぎりぎりいけそうね。強い呪文を打てば、少しは道が開けるかもしれないわね」

「それなら僕が一発できるだけ強いのをうつから、タイミング見てミリアはシールド張って、それでいこう」

それから二十分くらいたつと、瓦礫の山も崩される寸前の状態になった。

「思ったより長くもつたね。準備はいい？」

「いいよ」

「もちろん、いいぜ」

「code:9011a・見えざる道を与えよ。code:911
3b・鍵を開けよ、制限を解け。code:2721e・風の流れ
は激しく、眼下の敵を切り裂き給え」

決戦・逃亡（後書き）

なんと次話で完結しそうです。明日何とか更新するので、どうぞよろしく願います。

決着（前書き）

もはや最終話です。短すぎたかもしれませんね……。

決着

僕の魔法で、僕らを襲っていた瓦礫やらなんやらの大半が、粉々になった。

すぐさまドーザが突っ込んでいった。幸い、魔王は混乱していて、動きが止まっていた。

ドーザが敵との距離を半分ほど詰めたところで、ようやく魔王は動き始めた。

あのうっとうしい壁が、ドーザの行く手を阻んだ。しかしドーザはそのまま突っ込んでいった。

「はああ！」

ドーザは気合とともに斧を振りおろし、壁がへこんだ。壁を破壊できなかったことに舌打ちし、もう一度斧を振りかぶった。

僕は敵の攻撃が来ないので、ドーザに加勢することにした。

ドーザの二発目の攻撃で壁に穴があいたが、少しばかり小さすぎた。すると穴から、椅子の足が飛んできた。どうやら相手に攻撃する余裕を与えてしまったらしい。

ドーザはぎりぎり椅子をかわした。その間に、僕は呪文を唱えた。
「code:0544c・炎の海を、我が手より解き放ち、敵を飲み込め」

穴に向かって放たれた呪文は、飛んでこようとしていた敵の攻撃を燃やし、ドーザに壁を破壊する余裕を与えた。

振り下ろされた斧によって壁が崩され、すぐに僕たちは魔王に飛びかかった。

しかしすぐに無数の攻撃が僕たちを襲った。飛んでくる攻撃を避けながら、僕たちは何とか魔王との距離を詰めようとしたが、なかなか難しかった。さらに、

「code:7352c・破壊の意思よ、形を為せ」

魔王の放った呪文を、僕らはもろに受けてしまった。僕らは壁の

残骸に突っ込み、武器をとり落してしまった。

倒れこんでいる僕たちめがけて、魔王の魔法が襲ってきた。

「まずいつ」

僕が叫んだが、はつきり言って防げそうにない状態だった。

しかし僕たちめがけて降ってきていた瓦礫は、僕らに直撃する直前で、見えない壁に阻まれて粉々になった。

後ろに目をやると、ミリアが守りの呪文を唱えてくれていた。

「うおしっ！」

ドーザがすぐに起き上がり、魔王めがけて走り出す。

しかし魔王は慌てることなく、再び呪文を唱えた。

「code：*7999e・生ける城よ、わが命に従え。床よ、隆起せよ、壁よ、組みかわれ、我を守る盾となれ」

「これは……、またあの呪文かつ」

僕は悪態をついて、走り出した。

しかしあと一步のところで、新しくやってきた壁に阻まれてしまった。そのせいで僕とドーザは完全に分断される形になってしまった。

僕の攻撃では、この堅い壁を破壊できそうにないので、魔法でどうにかしたいのだが、ここにきて僕の魔力は底を尽きかけていた。ミリアもさっきの防御魔法で、大きな魔法は使えそうにないくらい消耗していた。

「どうしよう、ドーザ大丈夫かな」

僕は自分の剣を拾いながらつぶやいた。

「せめて小さな穴でも空けられれば、私たちも後方支援くらいはできるんだけど……」

僕は駄目押しで、低レベルな攻撃呪文を放ってみたが、壁が少し焦げただけで、いまいち効果はなかった。

僕らの注意が壁に向いていたそのとき、僕は背後にいやな気配を感じた。

振り返ると、扉が僕に向かって飛んできていた。

僕はかろうじて交わしたが、ほぼ同時に、ミリアが瓦礫にやられているのに気がついた。

「しまった、油断した！」

僕は慌てて駆け寄ったが、ミリアは完全に気を失っていた。死んでいないことに安堵したものの、ミリアの脱落は戦力的にも大きな痛手だった。

僕はさらに襲ってくる瓦礫を何とか防ぎながら、頭を働かせた。

敵は壁の向こう、ドーザがどうなったのか分からないが、とにかく僕も向こうに行かないことには、僕もドーザも大変だ。あまり時間をかけるわけにもいかないので、何か起死回生の一手がほしい。

僕が必死に考えているうちに、壁に異変が生じた。

急に表面にびっしりついていた目玉が、ぼとぼと落ち始め、大きく二・三回揺れた後、倒れこんできた。僕は全力で壁から離れ、何とか生きながらえた。

幸い、ミリアも無事だったようなので、僕はとりあえず状況判断に努めることにした。

壁の向こうを見ると、まず倒れているドーザが視界に入った。魔王の魔法が僕たちを襲ったことを考えても、こうなっていたことは半ば予想していたが、ドーザがまだ戦っていることをどこか期待していたので、実際に見て、激しく動揺した。

「ドーザが……、ミリアもやられて……」

しかしよく見ると、魔王のほうも困惑しているようだった。

「魔力切れじゃと……、そんなはずは、しかし……」

よく考えると、壁が倒れたあたりから魔王の攻撃が途絶えていた。もしこれが本当に魔力切れによるものだとしたら、この上ない好機だ。

「魔力切れか？ そうだとしたらもう逃がさないぞ」

僕は強気でしゃべった。本当は倒れそうなくらい意識がもうろうとしているのだけれど、それを悟られたら敵に付け込まれる。

「どうやらそのようじゃのお、魔力は城に蓄えたものを使っていた

のじゃが……、やはり全て引き出すことはできないようじゃ。しかし、おまえさんも相当に疲れているのじゃないかえ？わしの見立てでは勝機は五分五分だと思うのじゃが」

「そうだね、だけど絶対に負けられない。こんなところで死ぬ気はさらさらないからね」

「しかしここで戦えば、少なからず死ぬ可能性はあるぞい」

「……何を言いたい？」

「簡単なことじゃ、戦わなければよい。わしとてこんなところで死にたくはないからのお、ここはお互い、見逃すことにせんか？」

「……なぜだ？」

僕は相手が言いたいことが全く分からなかった。そもそも魔獣が人間を見逃そうなんて、聞いたことがない。それは魔王とて例外ではないし、どんな魔獣でも命をかけてでもヒトを倒そうとするのが普通だ。

「なぜ、か。ならば逆に聞こうか、なぜ、人間と魔物は争わねばならぬのじゃ。何百年も、お互い損なことばかりじゃないか。わしはこれ以上争いを続けたくないのじゃよ」

「魔王とは思えない考え方だな」

「いつ、魔王だといったかの。わしは正確に言えば魔王ではない。わしはヒトとして生まれた。しかしあるときわしは疑問に思ったのじゃ。なぜいつまでも争わねばならぬのかと。以来わしはヒトと魔獣の争いを終わらせる方法を考え続けた。しかし魔獣は本能から人を襲う。いくら研究を続けても、それを防ぐことはできなかった。しかし魔物の研究を続けるうちに、わしはあることに気がついたのじゃ。魔獣のほうを改善するのは不可能でも、逆ならできるのではないかと。つまり人間の絶滅による戦争の終結ならば、十分に実現可能ではないかと。もちろん、それはあまりにも酷な話。戦争の終結のためとはいえ、無条件に命をとられるなど、人間としても許されまい。じゃからわしは考えた。人間が魔獣になればよいのだと。わしの実験は成功した。そして今はこの通り。わしは魔王となって

魔獣に慕われる存在になった」

そういつて、目の前のやつは異様に長い爪を見せた。確かに人間ではありえない形、色合いだった。

「わしは喜んで研究の成果を人々に伝え、魔獣になることを勧めた。しかし……」

そこでやつは悔しそうな顔をした。

「しかし人々はこう言いおったのじゃ……『悪魔の研究だ』とな。わしは耳を疑った。戦争を終結させるためにわしが生涯をかけて研究したものを、生きる者すべての幸福のための研究を、こともあるうに人間どもは、悪魔の如き研究と罵ったのじゃ。わしはさまざまな境遇の人にこの研究を紹介した。しかし誰もよい顔をしなかった。そのときわしは悟ったのじゃ。ヒトは誰も戦争を終わらせたいなどと思っていなかったのじゃと」

僕は何も言い返せなくなっていた。事実僕だって魔獣になってまで戦争を終わらせたいとは、思えなかった。だって魔獣だよ？

「いずれにせよ、わしもお前も、今ここで争う必要はない。平和的解決が望めるなら、それが一番じゃろう？その二人も、すぐに治療すれば全く問題ないじゃろう。もしお主らがこのまま引き下がるというなら、わしも、わしの部下もお主たちには一切手出ししないことを約束しよう。どうじゃ？」

僕は予想していなかった展開に言葉が出てこなかった。そもそも魔獣の城で敵に和解を求められるとは思ってもいなかった。

どうだろう、確かにこのまま引き下がれば、三人とも確実に生きて帰れる。しかし今までの苦労はなんだったのだろうか。命をかけて戦って、結局倒せたのは下っ端だけでは、あまりにも報われないではないか。

しかし魔王も、根はいいやつなのかもしれない。戦争を終わらせようとして。でも感覚が普通じゃなかった。魔獣になってまで戦争を終わらせようという人は、そうそういないだろう。それがわからなかったただけだ。もしかしたらやつを倒すのは間違いなのかもしれ

ない。

けど、そうしたら本当の悪っていったいなんだろうか。悪人には悪人なりの理由があるのだし、生まれた時から悪人である人など、まずいないだろう。それでも、ヒトは悪人を捕まえ、裁く。

じゃあ理由にかかわらず、悪人になつたらそれは罪となるのだろうか。理由は関係ないのだろうか。

いや、でも情状酌量という言葉もあるくらいだし、やはり正当な理由があれば許されるのだろうか。しかしこれは本当に正当な理由なのだろうか。

戦争を終わらせようとしたところは問題ない。研究をするのも悪くない。でも、悪魔の城を建てて、すでにこの城に住む魔獣が人を襲ったこともあるし、やはりそれは罪だ。どんなにひどい目にあわされたからって、関係ない人を襲っていいはずがない。やっぱり彼は悪なのだろうか……。

しかし彼はただ戦争を終わらせようとしているだけだ。何も悪気はないのかもしれない。

僕が答えを出しあぐねていると、わずかにドーザが動いた。

「ドーザ！」

僕が駆けよるのを、魔王は特に止めもせずに見ていた。どこからどう見てもドーザはもう戦えそうにないから、問題ないと思ったのだろう。

「クルー（僕の名前はクルーだよ。覚えてる？）……、深く考えるな。おめえは深く考えすぎていつつも深刻になるんだから。余計なことは考えんじゃねえ」

ドーザは息も絶え絶えなのに、何とかそれだけ言うと、意識を失った。

「ドーザ……」

深く考えるな、か。いつもドーザは楽観的だったけど、僕は逆に考えすぎなのかもしれない。いくら考えても答えが出ないのなら、時には自分の直感を信じてみるのもいいのかもしれない。

僕は一つ深呼吸して、今まで僕の答えをじっと待っていた魔王モドキに伝えた。

「僕は戦う。僕はサプレサーだ。魔獣を倒すチャンスを不意にするなんて、ありえないっ！」

僕は言うや否や、敵に突っ込んだ。

敵もこうなることを半ば予想していたのか、いろいろな呪文で応戦してくる。しかしさっきまでのポルターガイストのような攻撃はない。

戦いはそう長くは続かなかった。

僕は魔法の詠唱の合間を縫って、自分の剣を突き出した。

それは間違いなく、マントを身に付けた老人の腹に、真っ直ぐ突き刺さっていた。

魔物の吹きあげるところにかくすんだ色の血とは違う、正真正銘、人間の血。真っ赤な血が老人の服を染めていった。

僕は震えていた。

魔獣を殺すのとは違う。人を殺した感覚が、僕の体を震わせた。震える僕を見て、老人は掠れた声でつぶやいた。

「ああ、そうか。そう、じゃった、か。わしが、違った、だけ……か。大切、なのは、ヒト。イノチは、平等じゃ、なかった、のか。わしだけ、平等、だと、おもって、おった、の、か」

言い終わると、老人は血を吐いてこと切れた。

本当は、早いところドーザとミリアを連れて脱出しなければいけなかったのだけれども、僕はその場を動くことができなかった。

命は皆平等だ。口でそういうことは簡単だけれども、僕たちは本当にそう思っているのだろうか。僕たちは魔獣と戦っているけれども、それは本当にただ守るためののだろうか。

僕が殺した魔獣とも人間ともつかない「彼」は、一つの打開策を示した。永遠に続くと思われた戦争を終わらす、現状では唯一の方法を。しかし僕も含め、僕たちは誰一人受け入れられなかった。戦争を終わらせたい。ずっと強く願っていても、その方法に食らいつ

くことはなかっただろう。全ては自分たちがこのままの姿でいたいという、ただ自分本位な理由によって、戦争を終わらせることはできなかった。

僕たちはどうあるべきなのだろう。

この時僕は、答えの出ない質問に、ひどく打ちのめされた感じだった。

決着（後書き）

……出直してきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2381i/>

魔王城攻略

2010年10月8日14時58分発行